

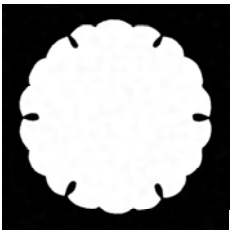
23の講義内容 共通語と方言語はどう変容していくのか

方言とは

同じ日本語でありながら、地域社会によって異なることば表現を用いる。それぞれの地域特有のことば、これを「方言」と云う。では、この「方言」のことばはなぜ異なっているのか。北から南へと細長い日本列島では、一年の季節めぐりは、それぞれの地域の自然環境によって異なり、そこでの人々の暮らしぶりも異なっているため、全国各地の「方言」すなわち、「お国言葉」がここに生まれてきたのである。

例えば、北海道、東北・北陸地方では冬になると雪が降る。この「空から舞い降りてくる白いもの」は、その降り方や形状によって名前が違っている。

この図は、一般的な「雪」を表したもので、「六つの花びら」のように見えることから「六花」と呼称する紋所である。北海道帯広市の製菓会社「六花亭」<http://www.rokkatei.co.jp/top.html> や京都の清水寺茶屋の名は、この「雪」の形をことばにしたものである。「六の花」という和歌のなかでの異名としても知られている。



この「ゆき【雪】」の語源については、

【語源説】

(1) 潔斎の義で、ユキヨシ(斎潔)の義か〔東雅〕。

(2) ユは斎、キはキヨキ(潔白)の義〔大言海〕。

(3) ユキヨ(斎清)の義〔名言通・和訓栞〕。

(4) やすく消えるところから、ユはヤスの反、キはキユルの下略〔日本釈名・滑稽雑談所引和訓義解〕。

(5) 空寒く凍てて雨が凝り雪となるところから、イツコリの反、またヨクコリの反〔名語記〕。

(6) ユルヤカヒ(緩氷)の義〔日本語原学Ⅱ林甕臣〕。

(7) ユラユラと来て清い物であるところから〔本朝辞源Ⅱ宇田甘冥〕。

(8) ヒユケ(冷氣)の義〔言元梯〕。

(9) 神の御幸の意で、ミユキ(深雪)の上略か〔金太郎誕生譚Ⅱ高崎正秀〕。

(10) 湯をユ、焼をヤクというのと同語か〔神代史の新研究Ⅱ白鳥庫吉〕。

(11) 豊年の嘉瑞であるところから、ユキ(幸)の義〔和語私臆鈔〕。

(12) ユはフユ(冬)のユ、キはシロキ(白)のキか〔和句解〕。

と云った具合に多説に及ぶことは、小学館『日本国語大辞典』第二版に記載されている。そして、此語の発音も、

【発音表記】

イキ〔栃木・富山県・石川・福井・飛騨・鳥取・島根〕。

イギ〔岩手・秋田・山形〕

イク〔富山県〕

イジ・イユギ・エギ・ズギ〔岩手〕

ウキ〔岐阜・飛騨〕

エキ〔越後・新潟頸城・富山県・石川・鳥取〕

ズキ〔福島〕

ユーキ〔鹿児島方言〕

ユギ〔千葉〕

ヨキ〔栃木・石川・鳥取・島根〕

ヨギ〔津軽語彙・岩手・秋田・山形〕

ヨギコ〔津軽語彙〕

リキ〔福島・茨城〕

と表現する。同じ「雪」を口に出して話すとき、ことばは少しずつ変化していることが見えてくる。

なぜ、このように変化するかといえば、人類共通のこととして、人は少しでも楽をしたがる生き物だからで、長いことばは短く、難しい発音は易しくとことばにも規制を張らなければ単簡な方へと突き進んでいくのが人の根本的本質なのだから……。年配の人がそのことばは変ですよと促して抑制するから伝統的な物言いが辛うじてこの世に保持され遺って行く。これすらしない世の中であっては、ことばはもつともつと限りなく変容して行くことになることが予知できるからである。

話しを「雪」に戻そう。その「雪」の降り方や形状についてどう表現されているのかを湛然に調べてみると、同じ「雪」とは云っても、ことばの表現に差異が存在するから実に不思議な気がする。実際に、「大雪」のことを「ドカ雪」「どんと雪」という地域があれば、ほんの僅かな「雪」を「こな雪」「細雪」「まだら雪」と表現する地域もある。こうした「雪」という天象の語を豊富に有する日本語はある意味で、ことばの豊富な使い様をみせてくれているともいえよう。

平安時代の歌人紀貫之が詠んだ歌に、

雪降れば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける 『古今和歌集』

（春には決して見られぬ花、すなわち六つの花である雪を称^{ただ}える）

ここには、雪がもたらす吉兆である稲の豊作の前触れを感得できる人々の喜びへと繋がっていくことを記憶し継承してきた由縁でもある。

これを単に「ゆき【雪】」という統括語で締めくくって、こまやかな冬の風物景詩である自然の景觀表現を失ってしまうことの方が問われる時代となってきた。今日いま現在の私たちの生きるこの世の中なのであるまいか。一口に日本語、そして日本語文化と云っても、この日本という土地でしか味わえない感性溢れる土地土地のことば群を丹念に足で歩き見聞蒐集し、これを一語一枚の日本地図の上に紡ぎ出す事業が『日本語地図』（国立国語研究所編）の編纂であった。この『日本語地図』を購入する人たちは、この恩恵を大切にしたい。それを未来を担う若い日本語の使い手に伝授していかねばならないと思う。

そして、この方言の学会ともいえる二〇〇七年度「日本方言学会」と「日本国語学会」とが、十一月一八日・十九日に沖縄県琉球大学と沖縄国際大学で開催された。この大会では、沖縄ことばの資料である『おもしろさうし』が取り上げられたり、沖縄ことば⇨琉球語と同じように日本語の外郭にあつて、日本語と深く干渉するアイヌ語についての講演がなされている。日本列島の住民は、私たちの先祖である和人だけではなく、アイヌ人も存在したからでもある。日本の地名語や植物名・動物名などには、多くのアイヌ語が東日本から北海道にかけて今もその名を留めている。日本語の「こころ」は、アイヌ語で「キロロ」、両語とも子音「k」で始まる。夜空に燦然と輝く「ほし【星】」を「ピリカ」など、多くのことばが触れあつて今日の日本語の基盤に繋がってきている。

〈コラム1：方言のことば〉

北海道方言①：あずましくない「連語」形」居心地が良くない。気分が落ち着かない。

○娘「ねーねー！、お母さああん！、お母さああん！聞いてよおお！」母「あー、あずましくない。いま忙しいからあつちに行つてなさい！」

○「遊ぶなら都会だけど、暮らすなら北海道の方があずましいんでないべか」
北海道方言②：ながまる「動」居心地のよい楽な姿勢になる。

○「まんず、ながまってけれ」。「ありや、こんなとこでながまっているよ。」

群馬方言：かけりっこ「名」徒競走。カブチ「カボチャ」。

○「おらがやろうはかけりっただけは早かったで、その代わり勉強はびりっけつだいね」

京都市方言：アイ「名」平素。ふだん。

○「アイはヨー仕事するサカイ、お正月ぐらいはゆつくりシトイヤス」

共通語

東京の山の手ことばを以て、「共通語」とした。この東京の山の手というところは、江戸時代(幕府旗本侍)、各藩の大名が参勤交代という制度に従い、各藩主とその家臣達が江戸住まいをしていたところにあたる。これが各地に江戸言葉を伝えることになり、明治時代に江戸から東京に変わったとき、

旗本侍が徳川家の中心地静岡岡崎駿州に戻り、此の江戸山の手の地に新たに移り住んだ人々(長州・薩摩の人)のことばが母胎となつている。江戸三〇〇年に培われた江戸下町ことばとは隔絶した世界のことばであることは云うまでもない。

この共通語は、現在のラジオ・テレビ放送を国内に配信する際、そのことばの手引き書となつている。日本放送協会「NHK」が中心となつて、このことばで情報配信するための「共通語」を学習し、この「共通語」なるものが全国の小・中学校での教育語としての母胎となることばなのである。とはいえ、国語を教える先生のなかにも上記の方言を使って教壇に立たれていた方も少なくはない。また、教育の場を離れて、政界すなわち政治家でも国会答弁に共通語でなくして、方言色をもって国会質問や答弁にあつた議員も昭和時代にはまだまだおられたのである。

平成の代ともなると、「共通語」は、まだ多くの積み残し「アクセント等」はあるものの、日本全国の人々が共通語でお互いを理解できるということばとして定着を見たと言っているのである。

この反面、方言が使われなくなって、ご自身の祖父母がふだん使つて喋つていたことばが消えてきていることも事実なのである。

〈コラム2〉

精精…『広辞苑』第六版曰「名」つとめはげむこと。力の限りを尽くすこと。幸若舞曲、大匠

「―を尽して作りたつる弓の長さは八尺五寸」曰「副」①力の及ぶ限り。精一杯。「―努力します」②十分に多く見積もつても。たかだか。「―三日もあれば出来る」

○私は釣りは下手で餌をとられるばかりですが、魚を肥やすため精精やっています。…ウイルヘルミナ女王の「魚釣りに」熱心だと聞くがよくつれますか」の問いに応えたことば。「昭和二十

六年三月十一日付、朝日新聞「天声人語」幣原喜重郎の死に所載」

深夜喫茶：オールナイトの”深夜喫茶”東京に六千三百軒。そこでは百円か百五十円のコーヒー一ぱいで夜明けまでねばれる。深夜営業の喫茶、〈略〉そこにとごろを巻いて悪用する人間が生ずる。百害あつて一利なしと思われる深夜喫茶を、なぜ止められないかである。”職業の自由”という憲法の原則からである。「昭和三三（一九五八）年七月七日付、朝日新聞「天声人語」※『広辞苑』第六版には未収載語。

新語・新方言の誕生

地方言語は完全に消滅していくと思いきや、マスコミ媒体というのは不思議な世界だ。消えてしまったと思っていたら、どこともなく蘇生する。それは活字媒体という世界がまずあつて、これを書物から吸収した人がそのことばのアクセントなどを知らずに口にするとうなるかを考えてもらえばおわかりであろう。文字表記語では古い懐かしきことばであり、今は意味も相違する新語となる。この新語が地方から蘇生すると「新方言」、都会の中央で蘇生すると「新語」となっていく。この新語の研究については、最近データベース化されていて、その発生源、現在の使用者の年齢性別、意味内容がたちどころに明らかになってきている。

では、このような現象は近年になって起こった物かというところでもないようだ。この世に今まで知られていない事物が誕生し、これに多くの名前や使用するための言語が必要になってくるとき、人は過去のことばに目を向け、これに縋る。明治時代の大勢の聴衆を前にして、己の考えを述べたことを「演説」と表現した。そのことばの創り手は、慶應義塾大学の創始者で、現在の日本銀行が発行する一万円札の肖像画像となっている人物と云われてきたが、このことばは古くは仏教の經典である『妙法蓮華経』に、

1 ○正法を演説したまふこと、初善・中善・後善なり。〔序品〕

2 ○ほとけ滅度のうち、妙光菩薩、妙法蓮華経をもちて、八十小劫を満するまでに、人のために演説す。〔序品〕

3 ○世尊、法を演説して、無量の衆生をわたし、無数億の菩薩を度してほとけの智慧にいらしむ。

〔序品〕

4 ○われ無数の方便・種々の因縁・譬喩・言詞をもて、諸法を演説す。〔方便品〕

5 ○舍利弗、過去の諸佛、無量無数の方便・種々の因縁・譬喩・言詞をもて、衆生のために、諸法を演説したまふ。〔方便品〕

6 ○舍利弗、未来の諸佛の、まさに世にいでたまふべきも、また無量無数の方便・種々の因縁・譬喩・言詞をもて、而衆生のために、諸法を演説したまはん。〔方便品〕

7 ○この諸佛もまた、無量無数の方便・種々の因縁・譬喩・言詞をもて、而衆生のために、諸法を演説したまふ。〔方便品〕

8 ○かくのごとき諸の世尊も、種々の縁・譬喩・無数の方便力をもて、諸法の相を演説したまふ。〔方便品〕

9 ○われらもまた、佛子にして、おなじく無漏の法にいれ共、未来に無上道を演説することあたはし。〔譬喩品〕

- 10 〇現在・未来のほとけの、そのかず、はかりあることなきも、また、もろもろの方便をもて、かくのとき法を**演説**したまふ。〔譬喩品〕
- 11 〇もろもろの欲染におきて、貪着ふかきがゆへに、こゝをもて方便して、ために三乗をとき、もろもろの衆生をして、三界の苦をしらしめ、出世間の道を開示**演説**す。〔譬喩品〕
- 12 〇われら、また、如来の知恵によりて、諸々のぼさつのために、開示し**演説**せしかども、しかも、みづから、これにきて、心ざしねがふことあることなかりき。〔信解品〕
- 13 〇一切の法にきて、智の方便をもて、これを**演説**し給ふ。〔藥草品〕
- 14 〇てに、よにいて、諸々の衆生のために、諸法の實を分別し、**演説**したまふ。〔藥草品〕
- 15 〇つねに法を**演説**す。〔藥草品〕
- 16 〇種々の言辞をもて、一法を**演説**したまへとも、ほとけの智慧にきては、海の一滴のごとし。〔藥草品〕
- 17 〇つねに天人のために、佛道を**演説**せん。〔授記品〕
- 18 〇ときに、もろもろの梵天王、心をひとつにして、こゑをおなしくして、偈をときてまうさく、『世雄両足尊、たゞしねがわくは、法を**演説**し、大慈悲力をもて、苦悩の衆生を度し給へ。』〔化城喩品〕
- 19 〇『大乘の法を**演説**したまへ。』
- 20 〇もし有頂にたちて、衆のために無量の餘経を演説せんも、また、いまたかたしとせず。〔見寶品〕
- 21 〇もし八万四千の法蔵、十二部経をたもちて、人のために**演説**して、もろもろのきかんものをして、六神通を多しめん、よくかくのごとくすといふとも、またいまだかたしとせず。〔見寶品〕
- 22 〇當時の衆會、みな、龍女の、忽然のあひだに、變じて男子となりて、菩薩の行を具し、すなはち南方無垢世界にゆき、寶蓮華に坐して、等正覺なり、三十二相・八十種好ありて、あまねく、十方の一切衆生のために、妙法を**演説**するをみる。〔提婆品〕
- 23 〇ひとつには、菩薩の行處・親近處に安住して、よく衆生のために、この経を**演説**すべし。〔安樂品〕
- 24 〇わか滅度のうちに、もし比丘ありて、よく、この妙法華経を**演説**せん、こゝろに嫉恚・諸惱・障・なく、また、憂愁し、および罵詈するものなけん。〔安樂品〕
- 25 〇そのときに、世尊、かさねてこの義をのべんとおぼして、偈をときてのたまはく、「つねに忍辱に行し、一切を哀愍して、すなはちよく、ほとけのほめ給ふところの経を**演説**せよ。〔安樂品〕」
- 26 〇わが滅後のうちに、佛道をもとめんもの、安穩にこの経を**演説**することを多んとおもはゞ、まさにかくのとき四法に親近すべし。〔安樂品〕
- 27 〇また、『諸佛身、相、金色して、無量のひかりをはなちて、一切をてらし、梵音聲をもて、諸法を**演説**し、ほとけ、四しゆのために、無上の法をとき給ふ。〔安樂品〕』
- 28 〇ねがはくは、ほとけ、未来のために、**演説**して、開解せしめたまへ。〔從地品〕
- 29 〇もしは僧坊にあり、または空閑の地、または城邑・巷陌・聚落・田里にして、その所聞のごとく、父母・宗親・善友・知識のために、ちからにしたがひて**演説**せん。〔隨喜品〕
- 30 〇諸佛大聖尊の、衆生を教化したまふもの、もろもろの大會のなかにして、微妙の法を**演説**したまふを、この法華をたまたんものは、ことごとくみな、これをきくことえん。〔法師功德品〕
- 31 〇もし舌根をもて大衆のなかにして**演説**するところあらば、深妙のこゑをいだして、よくその

心にいれて、みな歡喜快樂せしめん。〔法師功德品〕

32 ○また、もろもろの天子・天女・釋梵・諸天、この深妙の音聲の演説するところある言論の次第をきゝて、みなことごとくきたりてきかん。〔法師功德品〕

33 ○この義をさとりおはりて、よく一句一偈を演説すること、一月・四月、乃至、一歳にいたらん。〔法師功德品〕

34 ○法華をたもつをもてのゆへに、ことごとく諸法の相をしりて、義にしたがひて次第をさとり、名字・語言を達して、しれるところのごとく演説せん。〔法師功德品〕

35 ○よく千万種の善巧語言をもて、分別して演説せん。〔法師功德品〕

36 ○未來世に、もし、善男子・善女人の如來の智慧を信するあらは、まさに、ために、この法華經を演説して、聞知することえしむへし。〔屬類品〕

と三十六語も用いられていることばであった。意味を同じくするかが問われれば、新語なるが故に、用いる用途を異にしても支障ないのだ。この仏教の經典『法華經』を隅々まで読誦する御仁がどのくらい存在するだろうか？ 宗教人、信敬者はともかくある限られた人たちのことばにすぎなかったことばが大きく表舞台に蘇生してきて活潑に表現される。これが新語なのだ。

※明治時代、福岡県出身の川上音二郎が「オッペケペー節」と呼ばれる「演説歌」で、一世を風靡した。

※「憲法発布に際しての黒田首相演説」憲法発布式の翌日、黒田清隆首相が地方長官に対して行った演説の原稿。

原稿＝ http://www.ndl.go.jp/modern/img_1030/030-0011.html

現在で云えばIT万能の時代であつて、「コメント」を入力するという欄が必ず附記されていることにお気づきであるまいか？ この「コメント」なる用語も「批評・意見」と翻訳したとき、IT操作のなかでは異なりの語表現となつて一人歩きを始めている。この系統の新語を次に幾つか纏めておく。

〈コラム3：新語のことば〉

● ひもじい 「腹が空いてひもじい」 ↓ 「財布のなかがひもじい」

● コピペ(コピー・アンド・ペースト) ↓ インターネットで関連用語を検索し、使えそうな部分を複写して、そのまま貼り付ける不正な書記行為。 [2009/1/30 読売新聞「編集手帳」所収] ※傍線部は筆者記述箇所。

● 「二位じゃだめなんですか？」 [2010.03.05] ↓ <http://www.youtube.com/watch?v=mTX8pPm8j4>

二〇〇九年度の新語・流行語＝ <http://singo.jiyu.co.jp/>

<http://singo.jiyu.co.jp/nominate/nominate2009.html>

10 ～ 20代：トレンカ。ツイッター。ブランドムック。ワカチコ。

30 ～ 40代：○○^{可愛い}過ぎる…。歴女。

50代：朝カレー。ごめんねごめんね。ぼやき。

〔その他〕のギャル。カツマー。飛翔体。レギパン。ファストファッション。…あると思います。こども店長。派遣切り。オトメン。のり塩事件。友愛。政権交代。

二〇一〇年度の新語・流行語＝ <http://singo.jiyu.co.jp/>

<http://singo.jiyu.co.jp/nominate/nominate2010.html>

トップテン年間大賞

◆ゲゲゲのく ◆いい質問ですね ◆イクメン ◆AKB48 ◆女子会 ◆脱小沢（受賞者辞退） ◆食
べるラー油 ◆ととのいました ◆くなう ◆無縁社会
特別賞 ◆何か持っていると言われ続けてきました。今日何を持っているのか確信しました・・・
それは仲間です。

〈参考HP〉 日本俗語辞書 || <http://zokugo-dict.com/>

日本新語・流行語大賞の基礎知識 || <http://ryukou.kotw2.biz/>